

第7章 まとめ ～下毛原台地の開発と遺跡～

山国川下流域右岸に広がる平地は、西から東に沖積地の「沖代平野」、洪積台地の「下毛原」、「長峰原」沖積平野上部の「四日市平野」と続いている。そして、下毛原と長峰原の間に犬丸川が流れ、狭小な平野を形成しているのである。今回の中津日田道路は、下毛原を南北に抜けた後犬丸川を渡り、一部長峰原をかすめた後に山に向かうもので、それに伴う発掘調査は下毛原の歴史の一端を明らかにするというものであった。以下では、下毛原台地の水田開発に係わる歴史に焦点を絞って略述してみたい。

溜池灌漑

第114図は明治33年作成の地形図である。この段階の土地利用状況を見てもわかるように、下毛原台地上は基本的に畑地であり、谷頭に作られた溜池から引水する谷間に水田が展開しているのであった。しかも、この状況は、江戸時代の享保2年（1685）に着工し、元禄2年（1689）に完成した80町歩弱を潤す荒瀬井堰の水路が下毛原台地を貫通した後の状況であり、荒瀬井堰開削以前はさらに水田面積が少なかったはずである。

つまり、近世前期までの状況は、上畑成遺跡や田代遺跡の水路に示されるように、水源として谷頭に溜池を拵え、そこから台地上に水を揚げて水田を作る、いわゆる溜池灌漑による水田が主体であったと考えられる。上畑成遺跡や田代遺跡の溝は、16世紀代には確実に掘削されており、溜池（この場合は「から池」）の造成が戦国期に遡るのは確実である。しかも、上畑成遺跡では古代に遡る溝も確認されており、溜池灌漑がさらに遡る可能性も考えられる。この下毛原の最も奥（標高が高い地点）にある御澄池の堤が、発掘調査によって17世紀中頃の築造が想定されていることを考慮すると、上畑成遺跡の水路が溜池灌漑に係わることも十分可能性を有していると考えられる。今後の調査によって確定が期待される点である。

井堰灌漑

馬下遺跡では、圃場整備前の水路にほぼ重なる形で中世前期に遡る水路が検出された。馬下遺跡の立地する地点は、下毛原台地が犬丸川によって開析され、沖積地に向かって緩傾斜をなすところであり、台地上の上畑成遺跡等と立地条件を異にする。ここで検出された水路の水源は溜池ではなく、河川に架かる井堰である。現在の井堰（前田井堰）は馬下遺跡の1km西南西上流にあり、犬丸地区に配水するものである。水路は井堰から揚水した後、左岸沖積地を流れ、「黒川」集落の所（田中橋北側）で下毛原台地に行く手を阻まれるため、台地にマブ（隧道）を掘って犬丸側に通水している。おそらく、犬丸川が蛇行して「黒川」の台地にぶつかるために段丘が削られ、現在のようなトンネルを掘削することになったものであろう。

すなわち、犬丸川本流からの井堰灌漑は少なくとも鎌倉時代には始まっていたとすることができよう。しかし、その水を下毛原台地の上に乗せることは比高差がありすぎてできなかった。このことから、下毛原台地の水田が多くが溜池灌漑に頼り、さらにその水の少なさを補うために耶馬溪からわざわざ10km近くも水路を引き、山国川本流の水を揚げるという大土木工事を行わざるを得なかったのである。

では、犬丸川の井堰灌漑が中世以前に遡り得ないかというところではない。馬下遺跡と犬丸川を挟んで対岸の沖積平野にある伊藤田中遺跡（平成18年度調査、未報告）では、条里を潤す古代の水路が検出されている。この水路の水源は、水路の方向から考えて犬丸川と考えられる。現在条里地区（圃場整備により景観的には消滅）への配水を行う水路は犬丸川の「前田井堰」から分けてもらっているが、以前は「前田井堰」のすぐ下流側にあった「田中井堰」から取水していた。この水路が伊藤田中遺跡で検出された古代の水路を踏襲していることが想定できる。つまり、沖積平野への給水では犬丸川本流の井堰灌漑が古代から行われていた可能性が高いのである。

そう考えられるとすると、古代から中世の下毛原台地は基本的に畑卓越地帯であり、犬丸地区のように台地末端のやや低い場所では犬丸川本流からの河川灌漑による水田が開かれてはいたものの、基本的には台地を浸

食する小さな開析谷の谷頭の溜池灌漑で狭小な水田を経営する時代が長く続いたとすることができよう。この状況はさらに遡って古墳時代や弥生時代も大きくは変わらなかったと考えられる。むしろ、この時代に属する水路の検出が無かったことから考えて、溜池灌漑も古代以降に活発に行われるようになったものかもしれない。

集落の立地と展開

古代から中世の集落は、今回の調査地区内では確認されなかった。しかし、水路内などから多くの該期の遺物が出土している。至近に集落が展開していたことを窺わせる。現在の集落はいずれも下毛原台地の縁辺部にほぼ等間隔に展開している。逆に台地内部の平坦地は耕作地として利用されていたのであろう。このような景観が成立したのは中世の後半期であり、中世前半期以前の状況は不明である。

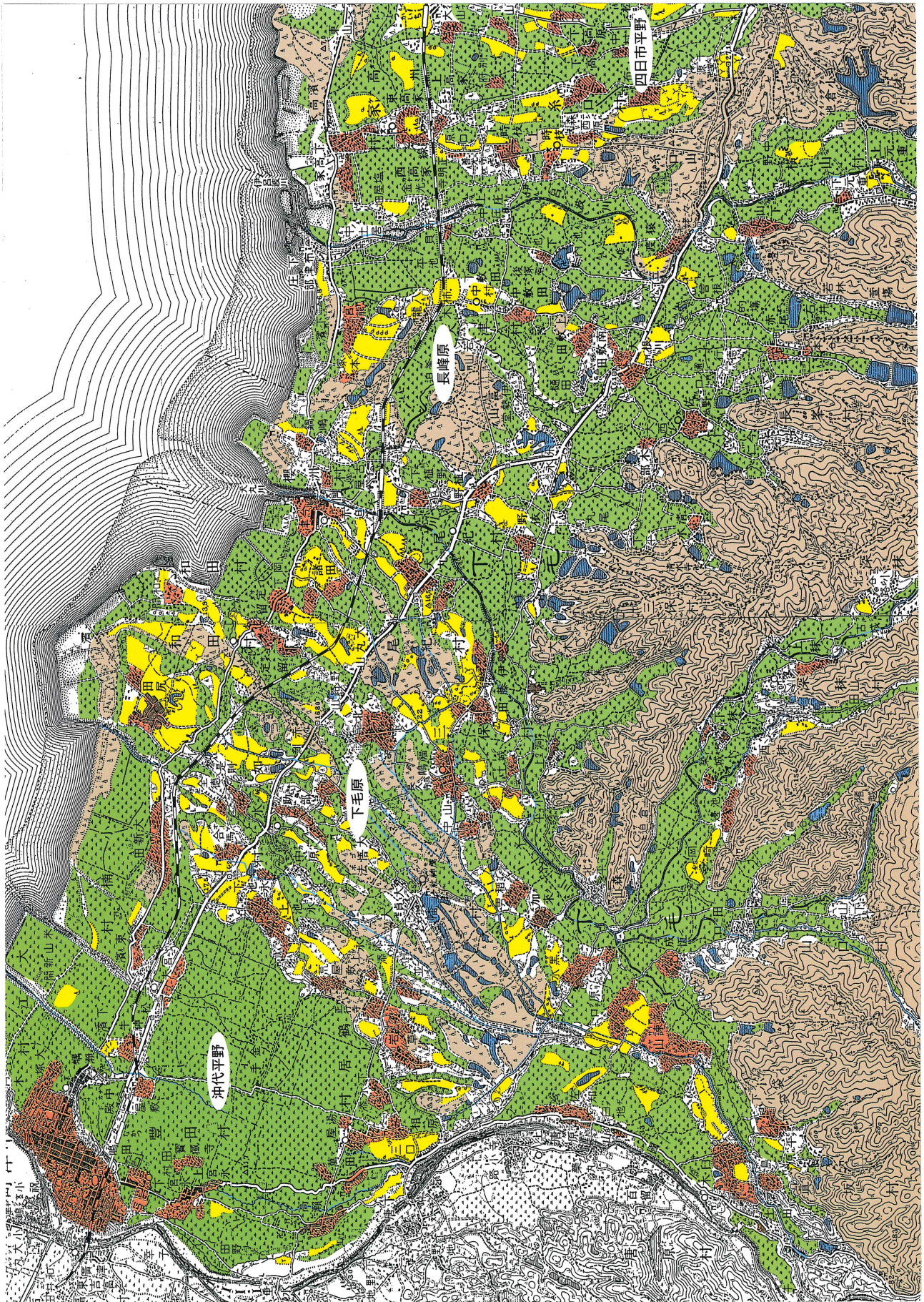
では、大規模な水田の開削を期待できない古墳時代はどうだったのであろうか。田代遺跡や諸田南遺跡、野田遺跡で発掘され、さらに定留遺跡や諸田遺跡で確認されているように古墳時代集落は台地の広範囲に大規模に展開していることがわかってきた。それらには大量の蛸壺や蛸壺焼成坑が伴うことからわかるように、海との関係を有していたのは明らかであり、畑作と漁業が主体であった。しかし、さらに想像をたくましくすれば、下毛原台地の犬丸川を挟んで南側の丘陵先端部に展開する須恵器窯の製作工人の居住地に比定することもできるのではなかろうか。

諸田南遺跡出土の須恵器は、その多くが白っぽく軟質に焼けた焼成不良品であった。さらに海岸に近い遺跡ではその割合は下がるようであり、そのことが須恵器供給体制の問題なのか、須恵器工人の居住にかかわる問題なのか即断はできないものの、今後詰めていく必要のある課題である。

さらに遡って弥生時代になると、田代遺跡で住居跡と貯蔵穴が確認され、馬下遺跡で溝状の遺構が確認されているが、大規模な集落跡は確認されていない。むしろ、中・小河川を望む台地南側の丘陵部に集落が立地している。開発が個別小規模なものであったことを示していよう。

縄文時代は、早期に比較的広い範囲で遺構が確認される。遺構は大きく2種類に分けられる。一つは陥穴であり、一つは焼土坑である。陥穴は諸田南遺跡D地区のみであったが、さらに北側の定留遺跡でも確認されている。焼土坑は集落に伴うものであり、田代遺跡と上畑成遺跡で検出された。

中津道路の調査は、平坦な下毛原台地を南北に縦断するものであったが、旧石器時代から近世に至る遺物、遺構が確認された。台地上の開発と利用状況の変遷の概略は上記のようであるが、今後は大規模な調査が進んでいる犬丸、諸田、定留地区での調査成果が明らかになった段階で、さらに詳細な検討が必要となろう。



第 114 図 下毛原台地土地利用状況

(明治 33 年作製地形図に加筆)